

『新スター・トレック』における
『ヘンリー五世』の引用および演じられ方
ーピカードとアンドロイドのデータとの関連において

佐藤 由美

The Quotations and Performance of *Henry V* in *Star Trek: The Next Generation* in Relation with Picard and Data the Android

SATO Yumi

2023年11月2日受理

抄 録

『新スター・トレック』においてアンドロイドのデータは人間に近づくことを目指し、その一環として時にシェイクスピア作品を演じる。今回取り上げるエピソード「亡命者」の冒頭では上司であるピカードが見守る中、『ヘンリー五世』のタイトルロールを演じている。この場面は、単に笑いを提供するにとどまらない。エピソードが進行するうちに、プロットと『ヘンリー五世』の上演された場面が相互に関連して展開することが見受けられる。その中で、データは上司であるピカードの言葉を無条件に受け入れているわけではなく、自分の抱く疑問をピカードに率直に話し対話を行う。エピソード中で『ヘンリー五世』は演じられるのみならず、データの質問の対象となり、ピカードの心中を表すため一説を引用され、さらには強大な敵と対面する際に一部アレンジされて用いられる。本論文ではこれらの現象を二作品の間テキスト性という観点から考察する。

キーワード：シェイクスピア、翻案、ポピュラーカルチャー、SF、
『スター・トレック』シリーズ

1.1 『新スター・トレック』におけるデータの位置

『新スター・トレック』(*The Next Generation*、以下 *TNG*) はジーン・ロッドンベリー (Gene Roddenbury) 製作総指揮のもと開始した SF ドラマにおける二つ目のシリーズである。¹ 『スター・トレック』全体のテーマは現在から数百年後、宇宙空間に進出した地球人が宇宙連邦という組織に加入し、惑星間の紛争回避のために尽力するというもので、これは全シリーズで一貫している。*TNG* が 1987 年から 1994 年

にかけて7シーズン放映されるという放映期間の長さは、最初のシリーズ『宇宙大作戦』(*The Original Series*、以下 *TOS*) をきっかけに広がりつつあった人気を反映しており、また *TOS* でも多様であった乗務員や宇宙人はさらに多様性を増している。シリーズが変わるごとに登場人物の多様性は広がりを見せ、視聴者の関心をかき立てる。

例えば *TNG* の主要人物の一人、アンドロイドのデータは士官として活動する。データのユニークな点はアンドロイドとして能力が高いにも関わらず人間に近い存在になろうとしていることである。そのために周囲の人々に様々なことを尋ね、時に失敗しながら彼らの行動を真似ようとする。

1.2 *TNG* におけるシェイクスピアとデータ

人間に近づく多様な試みの一環としてデータはシェイクスピア作品を演じる。『スター・トレック』シリーズ(特に *TOS* や *TNG*) で顕著な特徴の一つに、シェイクスピア作品からの引用が多く行われるという点があり、*TNG* においては引用を口にする人物の一人にアンドロイドのデータがいる。彼が何らかの役を演じる場面は *TNG* 中で二つあるが、今回はシェイクスピア作品をSFに取り入れるケースの一例として言及されることが多いシーズン3第10作「亡命者」(“The Defector”)を扱う。² この中で彼は『ヘンリー五世』のタイトルロールを演じている。このように *TNG* においてシェイクスピア作品への言及が多いことでデータが目立つ存在となっていることを認め、彼が果たしている役割について Christopher は以下のように述べる。

[The] connection between humanity, emotions, and Shakespeare is most often evoked in the assimilation narrative of Data, the android officer in *The Next Generation*. [...] Data’s quest to become human is one of the fundamental narratives on which the series is built.³

Christopher はデータが人間に近づくよう努力する姿が *TNG* における重要な要素の一つであると認める。が、同時に “In virtually every instance of Data’s use of Shakespeare as a tool to understand humanity, his apprehension of the text is mediated by Captain Picard.”⁴ と、データの背後にいる人物がピカードで、彼がメンター的な役割を果たしていることも指摘している。

確かにデータがシェイクスピアを受容するにあたりピカードが大きな影響力を持っていることは無視できない。しかし「亡命者」においても示されているように、データはピカードの指導を無条件に受け入れるわけではなく、自分の疑問を口にするのをいとわない。二人が対話するうちに、彼らに関わっているシェイクスピア作品とエピソード内の物語、すなわち彼らにとっての「現実」との関連が展開するという側面があることも確かである。また、視聴者はドラマを見るうちに『ヘンリー五世』と「亡命者」というエピソードの間には緩やかとはいえ類似性があると気づく。この二作品

には間テキスト性があり、『ヘンリー五世』からの引用およびそのアレンジがどう行われるかはドラマの進行にも影響を与えている。

以下、演技がどう行われるかを描写しつつ、その中で用いられるテキストが物語世界にどのような役割を果たしているか分析する。

1.3 「亡命者」で演じられる場面

「亡命者」は鶏が夜明けを告げる声が聞こえ、樹木が立ち並ぶ中テントが見え、そこから煙が立ち上るといふ田園的な場面から始まる。実はこれはデータがホログラム作成装置（「ホロデッキ」と呼ばれている）で他の登場人物や背景を合成したものである。その中で彼の上司であり宇宙船エンタープライズ号の艦長でもあるピカード（Picard）も『ヘンリー五世』の登場人物の一人、兵士ウィリアムズ（Williams）として登場する。SFであるはずのこのドラマがこのような場面が始まることの説明はされないが、視聴者はこれがホロデッキで作成されたものだと見当をつけただろう。

演じられるのは、『ヘンリー五世』の決戦であるアジンコート山の戦いの前夜、ヘンリーが兵士に変装して一般兵士と会話をするくだりである。⁵ウィリアムズとベイツ（Bates）は朝と共に近づく開戦に慄いている。そこにフードで顔を隠し質素な服装をしたヘンリーが近づき、トマス・アーピングムの配下とのみ名乗り彼らに話しかける。戦況をめぐって情報交換するうち、ヘンリーは“I think the king is but a man, as I am”（IV.i.97）と、王も一人の人間であるので戦況を聞けば恐怖を抱くだろうと語り始める。（ここでピカードが傍らでデータを見守っている様子が示される。）それに対しベイツが“He may show what outward courage he will, but I believe, as cold a night as 'tis, he could wish himself in Thames up to the neck.”（IV.i.107-109）と王も内心では戦争を避けロンドンに戻りたいのではと推測すると、ヘンリーは“Methinks I could not die any place so contented as in the King's company, his cause being just and his quarrel honourable.”（IV.I.116-18）と戦争の大義は正当なので自分は王の傍らで死ぬのなら満足だと主張する。それに対しベイツとウィリアムズは反感を示し、特に後者は“But if the cause be not good, the King himself hath a heavy reckoning to make when all those legs and arms and heads chopped off in a battle shall join together at the latter day and cry all, we died at such a place.”（IV.i.123-2）と大義が正しくなければ王の責任は重いものとなるだろうと反論する。主張の激しさは、切断される四肢や頭部という生々しい描写が用いられていることにもうかがえる。それに対しヘンリーが“The king is not bound to answer the particular endings of his soldiers, the father of his son, nor the master of his servant.”（IV.i.141-42）と兵士たちの命を軽視していると解釈される台詞を発したところで、ピカードが声をかけデータの演技が向上したことを評価する。データはここでホロデッキを停止する。その後データが“I plan to study the performances of Olivier, Branagh, Shapiro, Kullnark”（02:20～02:24）⁶と名優たちの演技に関心を示すと、ピカードは“Data, you're here to learn about the human condition, and

there is no better way of doing that than by embracing Shakespeare.” (02:24 ~ 02:35) と、演技の主目的はシェイクスピア作品を通して人間について学ぶことだと思いを出させる。ここで亡命者に関する連絡が入ったことでピカードの指導は中断され、ホロデッキは完全に終了する。

この場面が「亡命者」において果たす役割として容易に思いつく点の一つは、データが人間に近づくため努力している姿をコメディリリーフとして紹介しているのではということである。例えば顔面が白く人間ではないことが明白なデータが「王様だって俺と同じ人間にすぎない」と発するとき、笑いを抑えられない視聴者もいたであろう。また、ピカードがデータの演技にコメントしたり、後者の意欲が本来の目的から逸れているように感じられて前者が不安げな表情をしたりする場面も、ピカードを演じるパトリック・スチュワートが著名なシェイクスピア俳優の一人であることを知っている視聴者には笑いを誘うものであっただろう。「亡命者」というドラマの深刻さを先に軽減することが、この場面の目的の一部であったようにも思える。

しかし、ドラマを視聴するうちに、『ヘンリー五世』に関する言及はこのオープニングのみならず、短いが複数の言及や引用が後になっても行われていること、およびそれらがプロットと関連していることがわかる。『ヘンリー五世』の演技や引用はコメディリリーフ以上の役割を果たしていると考えられる。本論文では、「亡命者」のどの部分で『ヘンリー五世』の台詞が言及、引用ないしアレンジされているか、その台詞は（引用であるならば）原作およびドラマの中でいかなる文脈で発されているかを分析する。その過程で、アンドロイドのデータがこの作品の一部分を演じたことで、またデータとピカードの対話を通して、この場面とドラマとの関連およびもたらされた効果を考察する。

2.1 「亡命者」と『ヘンリー五世』

上述のような場面で始まる「亡命者」のプロットを簡潔に述べる。ピカードたちは「武器補給部のシートール中尉」と名乗る亡命者に遭遇する。彼によれば、ロミュラン帝国は条約に違反して中立地帯へ侵攻し、48時間後に惑星連邦に対して開戦することを計画しているという。シートールも陰謀を得意とすることで知られているロミュラン帝国の者であるため、ピカードたちは彼がスパイではないかという疑いを隠せない。⁷ 秘密基地が用意されているとおぼしき中立地帯である惑星ネルヴァナ3号に情報の真偽を確認するため近づけば、自ら戦争を招くことになる。ピカードたちが苦悩する中、亡命者は自分の本名と身分が「ジャロック提督」であることを明かし、亡命した理由を告白する。戦争を起ささないよう司令部に訴えてきたが聞き入れられず、家族の（特に幼い娘の）将来のために戦争を止めようとしたと語る。それを知ったクルーは敢えてネルヴァナ3号に接近し捜査するが、基地も兵器類も装備されていないとわかる。そこでジャロックは、自分を疎んでいる帝国司令部に偽の情報を与えられ、忠誠心を試されていたと悟る。ほどなくして現れたロミュラン帝国軍にエンタープライズ号は攻撃されそうになるが、脱出に成功する。その後、地位も家族も故郷も失っ

たジャロックは家族あての遺書を残して自害する。

一方『ヘンリー五世』は中世イングランドの英雄として知られた王を扱った作品である。即位して間もないヘンリーはフランス王位をも手にしようとして決心する。そこに現れたフランスの大使は即位前のヘンリーが放蕩にふけていたことに言及し、ヘンリーの要求を拒否するのみならず彼を侮辱する。その結果ヘンリーはフランスとの戦争を始めようと決断する。ヘンリーは兵士たちを鼓舞し、兵力の違いを乗り越え快進撃を続けるが、遠征が続くうちに兵士たちの疲弊は進む。アジンコートの戦いを控えフランス軍とイングランド軍の兵力の大幅な違いを知り、兵士たちには不安に思う者も現れる。ヘンリーは身分を偽って一般兵士たちと会話をするが、彼らに王の戦争責任の重さを指摘され、王という立場の困難さを嘆く。彼が決戦の直前に全軍を前に檄を飛ばし士気を高めた結果、イングランド軍はアジンコートで大勝する。この結果ヘンリーは未来のフランス王位を保証される。

2.2 共通点

これら二作品には緩やかながら共通点がある（『ヘンリー五世』についてはデータの演じた場面を主要な考察対象とする）。Lörkeが“The play does not serve as a model for the entire episode, which would be an indicator of high intertextuality, but the scene nevertheless introduces the main theme of the episode: that of posing as someone else.”⁸と指摘しているとおり、主要人物の一人が正体を偽って他の登場人物と接するが、当初の目的を果たせず失敗に終わるという点である。『ヘンリー五世』においてヘンリーはアジンコートの戦いの前夜、一般兵士に扮して「(自分の部下である) トマス・アーピングムの配下」と所属のみを告げ、名も明かさない状態で兵士たちと会話する。コーラスによればこれは兵士たちを激励するためであるが、⁹結果は激励とは程遠い。「亡命者」ではウィリアムズとヘンリーとの決闘の約束を含む原作の台詞が大幅に削除されている。それでも「大義は正しいので自分は戦死しても不満はない」という趣旨のヘンリーの台詞に対し、二人の兵士が感情を害し大義に批判的な態度を示す様子は表情にも台詞にも明らかである。

一方「亡命者」におけるロミュラン人のジャロックは、当初は武器補給部のシートール中尉と名乗り、所属を尋ねられても自分の名を使って偽ったうえで情報提供をする。そのようにして彼は戦争を防ぎ自分の家族を守ろうとするが、ピカードたちの信用を得られないため事態を打開できない。後に本名と職階を明かしても、それに伴い虐殺事件の指揮をしていたという過去が明らかになったため、さらに不利な立場に置かれる。真相が明らかにされた後、ピカードとジャロックたちはロミュラン軍の陰謀を防ぐことに成功するが、それはジャロックの破滅につながる。

もう一つの共通点は、『ヘンリー五世』自体ではなくその演じられ方と、中立地帯にあるとされていた基地や兵器が存在しないと明らかになる場面である。冒頭の場面はヨーロッパのどこかの村かと思わせる、本当らしい見せかけを持つ。データの演技が進むにつれ、これはホログラムの見せる立体映像だと明らかになり、映像が終了す

るところで見せかけは一瞬にして消え去る。一方でネルヴァナ3号は、エンタープライズ号が接近してようやく武器も兵器も見当たらないとわかる。もしそれらが装備されていればレーダーを欺く遮蔽装置があるはずだが、それすら存在しないと判明する。この発見はエンタープライズ号に危機をもたらすが、クリンゴン軍の協力によりロミュラン軍の陰謀を阻む結果にもつながる。

これらの共通点が示唆しているのは、二作品には偽りや見せかけが存在し、視聴者に提供される情報が、ジャロックの正体であれ秘密基地が存在するかどうかであれ、虚実のいずれなのか見極めるには時間が必要となることである。¹⁰

2.3 「亡命者」のその後の展開と『ヘンリー五世』との間テクスト性

「亡命者」における虚実あるいはフィクションと（作中の）現実との乖離をどうとらえるかは、データの演技の練習が終わった後の『ヘンリー五世』に関する会話の中で続けられる。亡命者出現の連絡を受け、ピカードとともにブリッジに向かいつつデータは“Captain, why should a king wish to pass as a commoner? If he is the leader, should he not be leading?” (03:01 ~ 03:07) と質問する。ヘンリーが変装して兵士たちを激励する試みは成功したとは言い難いため、この疑問はデータにとってもっともなものであろう。それに対しピカードは“Listen to what Shakespeare is telling you about the man, Data. A king who has a true feeling for his soldiers would wish to share their fears with them on the eve of battle.” (03:08 ~ 03:18) と指導を続ける。作品の終盤におけるヘンリーはこの描写にあてはまるかもしれない。（また、『ヘンリー五世』を知らない人々への簡潔な紹介と言えなくもない。）しかし、データが演じた場面に描かれているのは「兵士たちに誠意を持ち、彼らと恐怖を共にすることを望むであろう」王とは言い難い。ヘンリーは自分の望むような言葉を口にせず戦争の大義を疑う兵士と口論し後日決闘しようとして取り決め、そして兵士たちが去ったところで

The slave, a member of the country's peace,
Enjoys it, but in gross brain little wot
What watch the king keeps to maintain the peace,
Whose hours the peasant best advantages. (IV.i.254-57)

と、現代人の感性から見れば反感を招きかねない嘆き方をする、未熟な人物である。この時点では亡命者の登場に伴う事態の深刻さはピカードとデータにはまだ示されておらず、ヘンリーのイメージについて二人とも深く考えていない様子がかがわれる。

次に『ヘンリー五世』に関する言及が行われるのは、21時間後に戦争が始まるかもしれないという切迫した場面の中である。

PICARD. How is the crew's spirit?

DATA. They are concerned, of course, Captain, but confident. Do you not see that, sir?

PICARD. Data, unlike King Henry, it is not easy for me to disguise myself, and walk among my troops. (20:05 ~ 20:13)

この会話とその後の場面はいくつかのことを示唆している。データの提案が、演技で学んだことが現実世界でも応用可能だと考える彼の未熟さを露呈していることは確かである。ピカードが変装したとしても科学技術の進んだエンタープライズ号内で正体が露見することは確実なので、ヘンリーの行動をピカードが真似ることは不可能である。しかし、データの行動には別の解釈ができる。データはピカードをヘンリーになぞらえている。ピカードがクルーを激励することは『ヘンリー五世』というフィクションを現実世界に反映させることであり、データは行動によって現状を打開しようと考えていると言える。

データ退場後のピカードの表情と独白は、彼とヘンリーの類似性を暗示する一方で否定する要素をも持つ。ピカードは“the conscience-stricken captain, [...] who faces a decision which may lead the universe into full-scale war”¹¹として描かれ、それは兵士たちと別れた後責任の重さに“We must bear all” (IV.i.205) と苦しむヘンリーと共通している。しかし、ピカードとヘンリーの相似は、「王であるがゆえに庶民には理解できない悩みをかかえている」と自覚するヘンリーの台詞のみならず、ピカードの独白によっても揺らぐ。その独白は“Now, if these men do not die well, it will be a black matter for the king that led them to it.” (IV.i.131-32) である。これはデータの演技では削除されたが、元来兵士ウィリアムズのものである。ピカードは艦長として多くの者の命を預かる立場にあるゆえに苦悩する。また、彼は自分の責任の結果としてウィリアムズの語る惨状が起こりうることを自覚している。ピカードはクルーの今後を案じ、直接会話はしないものの「彼らと恐怖を共有する」。ピカードの責任感ある艦長としてのイメージが結果的に高まる。

最後に『ヘンリー五世』への言及がみられるのは、ロミュラン軍にネルヴァナ3号への侵入を気づかれ危機に瀕する場面である。ロミュラン軍司令官はエンタープライズ号が中立地帯に侵入したことを批判し降伏を迫るが、ピカードは以下のように返す。

TOMALAK. I urge you, Captain Picard, surrender. Consider the men and women you would lead into a lost cause.

PICARD. If the cause is just and honourable, they are prepared to give their lives. Are you prepared to die today, Tomalak? (41:47 ~ 42:09)

ピカードは「失われた大義」に触発されたかのように「大義が正しくて名誉あるものならば」と発する。これは明らかにドラマ冒頭で引用されたヘンリーの台詞“[the

king's] cause being just and his quarrel honourable”を元に作られたものである。ピカードは彼なりの方法で『ヘンリー五世』を現実世界に持ち込む。劇中の台詞をアレンジして新たなテキストを作り、それを強大な敵に向けることで、攻撃されようとも降伏しないという自分たちの意思を表している。¹² このテキストは厳密ではないにせよ弱強五歩格に近い響きを持つため古典的な風格と説得力を帯びる。これは言葉による闘いであり、演技から学んだことを元に、変装してクルーの様子を見回ったらどうかとピカードに提案し、行動を持ち込もうとするデータの発想とは対照的である。

また、大義のためエンタープライズのクルーの命が失われるだろうが、それでも彼らは士気が高いので命をささげる覚悟ができておりトマラクを倒すかもしれないという文言全体にも原作からの改変が見られる。原作では兵士たちに対して「大義は正しいので自分は戦死しても不満はない」と言うヘンリーの台詞があったが、ピカードはこの台詞の主語をクルーに置きかえ、彼らは（ヘンリーのように）覚悟ができていと明言する。新たなテキストを通してピカードとクルーとの団結が暗示される。圧倒的な兵力の差にもひるまず団結してフランス軍を打ち負かそうという意志を持ち最終的に大勝する、アジンコートにおけるヘンリーの姿をテキストの中に何うことも可能である。¹³

2.4 二作品の間テキスト性

「亡命者」が『ヘンリー五世』との間テキスト性を結末部分まで保っていることはこれまで考察したとおりであり、ピカードとヘンリーとの関連性は時にゆらぎながらも緩やかに保たれていることもうかがえる。最後にピカードが生み出すテキストは、ピカードがシェイクスピアに造詣が深いだけでなく、シェイクスピア作品をめぐって短時間とはいえデータと議論してきた結果でもあると言える。アンドロイドがイングランドの英雄を演じる場面は一見突飛で、「亡命者」の冒頭では違和感を招くものであったかもしれないが、物語が展開するうちにピカードに新たなテキストを生み出す機会を与え、作品世界での問題を解決するきっかけとなっている。

サブカルチャーと呼ばれるジャンルに属するフィクションが著名な戯曲を題材に製作される場合、戯曲のどの要素を取り出すか、またはアレンジするかは困難な課題である。視聴者は多様であり、古典作品に通じている者もそうではない者もいるであろう。作品の一部でありプロットと関連付けが可能な短い場面を取り出して紹介するという手法が「亡命者」が説得力を与えており、間テキスト性の成功例となっていると言えるだろう。

なお、この作品の前年にアメリカでもケネス・ブラナー版の『ヘンリー五世』が上映されたという事実がこのドラマの展開を多少なりとも有利にしたことは否定できない。この映画を視聴した視聴者は、その記憶をもとに上で取り上げた場面を鑑賞し、原作への言及に気づいたであろう。この場合間テキスト性はさらに複雑さを増すこととなるが、これについては後日の課題としたい。

- * 本稿は2023年9月3日、英米文化学会第41回大会で行った発表「『新スター・トレック』におけるシェイクスピア作品の引用—アンドロイドのデータと『ヘンリー五世』の場合」を大幅に補足および変更したものである。

註

1. 詳細は『スター・トレック』公式サイトを参照。https://paramount.jp/startrek/ (2023年10月28日閲覧)
2. もう一つはシーズン7エピソード23の『出現』(“Emergence”)である。冒頭でデータは『テンペスト』のプロスペローを演じる。
3. *Shakespeare on Stage and off*, p.234.
4. *Shakespeare on Stage and off*, p.235.
5. 以下は原作の台詞を大幅にカットしてあり、ヘンリーと兵士の会話の要約となっている。戯曲からの引用はShakespeare in Production シリーズの *Henry V* の幕、場および行で表し、その他の台詞は分および秒を用いて行う。
6. 「亡命者」が放映されたのは1990年1月1日であるが、前年はケネス・ブラナー主演の映画『ヘンリー五世』が話題を呼んでいた。そのことを考えると、この台詞で言及されている俳優のうち、Shapiro および Kullnark は未来世界の架空の人物と思われる。
7. この後、ロミュラン人の陰謀についてピカードおよび士官たちの間で会話がなされる。自分たちでは攻撃を始めず、敵がそうするように仕向けるという特徴が語られる。

DATA. Commander, that would not be an atypical Romulan ploy. In their long history of war, the Romulans have rarely attacked first. They prefer to test their enemy's resolve.

RIKER. I think [Jarok]'s a plant to draw us into the Neutral Zone. Then we'll look like the aggressors.

PICARD. And the Romulans would have a legitimate excuse for responding in force. (10:31 ~ 10:50)

8. Lörke, p.42.
9. But freshly looks and overbears attaint
With cheerful semblance and sweet majesty,
That every wretch, pining and pale before,
Beholding him, plucks comfort from his looks. (IV.opening.38-41)
10. また、『ヘンリー五世』のあらすじを知る視聴者にとっては、二作品のもう一つの共通点は忠誠心と陰謀であると感じられたであろう。『ヘンリー五世』においては、ヘンリーが重用していた貴族三名がフランス側のスパイであると判明する。

彼らが連行される際ヘンリーは、忠誠心を持つ重臣であり友人でもあるとみなしていた反逆者たちに怒りを表す。「亡命者」においては、ジャロックが陰謀に巻き込まれる。彼の批判的な態度をロミュランの司令部に疎まれ、偽の情報で忠誠心を試される。最終的には地球人に戦争を起こさせるための駒として利用された上に反逆者とみなされる。いずれの作品でも陰謀に利用された者たちは破滅する。

11. Smith, p.179.
12. だがトマラク司令官はシェイクスピア作品を知らないため、この発言を単なる脅しとしてとらえる。
13. 「亡命者」の終盤にも間テクスト性を読み取ることが不可能ではない。この世界では戦争を避けることはできたが犠牲者が全く出なかったわけではない。『ヘンリー五世』においては、アジンコートとの戦いの末に少数で重要人物は少ないがイングランド軍に死者が出たと語られている。「亡命者」においてはジャロックが終盤で祖国に反逆者と認定され全く重要性を持たない者となってしまう、自害を選ばざるを得なくなった。ジャロックはヘンリー同様に正体を偽って事態を好転させようとしたが、その結果はヘンリーの生み出したものとは対照的である。

参考文献

書籍・学術誌

- Burt, Richard. *Shakespeares After Shakespeare*. 2 vols. Westport: Greenwood Press, 2007.
- , "Dumb and Dumber Shakespeares: Academic Fantasy, the Electronic Archive, Loser Criticism, and Other Diminished Critical Capacities." *Un-speakable ShaXXXspeares*. Palgrave Macmillan, New York, 1998. 1-29.
- Christopher, Brandon. "Star Trek's Shakespeare Problem." *Shakespeare on Stage and off*. Eds. Graham, Kenneth, and Alysia Kolentsis. McGill Queens University Press, Montreal and Kingson, 2019. 230-240.
- Dionne, Craig. "The Shatnerification of Shakespeare." Ed. Burt, Richard. *Shakespeare after Mass Media*. Palgrave Macmillan, New York, 2002. 173-91.
- Hatchuel, Sarah. "Shakespeare's Humanizing Language in Films and TV Series." *Borrowers and Lenders: The Journal of Shakespeare and Appropriation* 12.2 (2019).
- Kreitzer, Larry. "The Cultural Veneer of Star Trek." *Journal of Popular Culture* 30.2 (1996): 1-28.
- Lörke, Melanie. "Shakespeare in Space: A Star Trek towards Plurality." *Shakespeare Seminar* 7 (2009). 39-48.
- Shakespeare, William. *Henry V*. Shakespeare in Production. Ed. Smith, Emma. Cambridge: Cambridge University Press, 2002.
- Shakespeare, William. *The Oxford Shakespeare: the Complete Works*. Eds. Wells,

Stanley, and Gary Taylor. 2nd ed., Oxford: Oxford University Press, 2005.

テレビドラマ・映画

Shakespeare, William. *Henry V*. Dir. Kenneth Branagh. MGM. 1989.

“The Defector.” *TNG*. Dir. Robert Scheerer. Season 3. Episode 58. Paramount Pictures. 1 January 1990.

“Emergence.” *TNG*. Dir. Chris Bole. Season 7. Episode 23. Paramount Pictures. 9 May 1994.

